

M-GTA研究会 News Letter No. 122

ニューズレターは、発表者の学びやSVのコメントを加えた研究の概要等を掲載したものです。

M-GTAに関する学習の素材となるものです。ご活用ください。

また、記載された研究概要は未発表のものであるため、取り扱いには十分ご注意ください。ご自身の学習以外での活用、転載、SNSでの公開、第三者への共有といった行為は禁止しています。ご理解とご協力をお願いします。

<目次>

◇第104回定例研究会	1
-------------------	---

【第一報告】

後藤 雅子／訪問看護師と重症心身障害児の社会的相互作用のプロセス—訪問看護師の視点から—

1. 発表の過程を通しての感想や学び	2
2. スーパーバイザーのコメント	2
3. 研究の概要	3

【第二報告】

田原 ゆう子／臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相—新任期にある若手看護系大学教員に焦点を当てて—

1. 発表の過程を通しての感想や学び	6
2. スーパーバイザーのコメント	7
3. 研究の概要	8

【参加者の感想】	12
----------------	----

◇近況報告	12
-------------	----

◇次回のお知らせ	13
----------------	----

◇中四国M-GTA研究会 活動報告	13
-------------------------	----

◇編集後記	13
-------------	----

◇第104回定例研究会

【日時】2025年 5月24日(土)

【会場】大正大学 2号館 3階 学部閲覧室／ハイブリッド(対面及びZoom開催)

【第一報告】

後藤 雅子 (湘南鎌倉医療大学大学院 博士後期課程)

Masako GOTO: Shonan Kamakura University of Medical Sciences

訪問看護師と重症心身障害児の社会的相互作用のプロセス—訪問看護師の視点から—

Social Interaction Processes between Visiting Nurses and Children with Severe Motor and Intellectual Disabilities: Insights from the Perspective of Visiting Nurses

1. 発表の過程を通しての感想や学び

この度は、研究会における発表という貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。また、発表を通じて多くの先生方より貴重なご示唆を頂戴し、今後の研究の進め方を見直す大きなきっかけとなりましたこと、心より感謝申し上げます。

今回の発表では、研究計画の段階において、自身の研究テーマやリサーチクエスチョンに対し、データ収集方法やインタビューの内容がM-GTAに本当に適していたのかという、根本的な問いに立ち返る機会となりました。すでに収集しているデータをどのように活かすかについても、今後、早急に検討し、行動に移さなければならないという、気の引き締まる思いを強くいたしました。なにより、自分が本当に知りたかったことは何かを改めて見つめ直し、それを言語化し、文章に落とし込んでいく作業の必要性を痛感いたしました。現在のデータで、それを叶える可能性は十分にあると感じておりますが、自身の表現力の不足や、M-GTAという手法における限界についても認識するに至りました。

今後は、今回の研究会でご助言くださった先生方に引き続きご指導を仰ぎながら、丁寧に分析を進め、論文としてまとめていきたいと考えております。また、この取り組みが、研究にご協力いただいた皆様へのささやかな恩返しとなり、訪問看護や在宅看護の発展にもわずかでも貢献できればと願っております。この度は誠にありがとうございました。

2. スーパーバイザーのコメント

佐川 佳南枝（京都橘大学）

本研究は、言語的コミュニケーションが困難な重症心身障害児と訪問看護師との相互作用を主題とし、M-GTAを用いてそのプロセスを理論化しようとしたものでした。困難なコミュニケーション、手探りの相互作用に密着し、解釈し理論化していこうとする姿勢は高く評価できます。一方で、理論的基盤としてジンメルの相互作用論を掲げている点と、M-GTAという方法の整合性については慎重な再検討が必要と考えました。

ジンメルは、社会を一回一回の相互作用によって生成される現象として捉えており、意味の曖昧さや生成性、関係の出来事的側面に本質的な関心をもつ思想家です。ただし、ジンメルは現象学者ではなく、形式社会学の立場にありました。その一方で、彼の「相互作用の一回性」に注目する姿勢は、現象学的社会学や関係論的アプローチとの接点を持っており、本研究のような現象の捉え方との親和性は十分にあると考えます。彼の視点を踏まえるならば、非言語的・身体的な反応に対する感受の瞬間、通じた“感じられる”意味の立ち上がり、わからなさのなかで関係が少しずつ形成されていく感覚などを丁寧に記述し、分析する方法としては、現象学的アプローチやナラティブ・アプローチの方が一貫性があると言えるでしょう。

また後藤さんは、訪問看護の映像を撮影し、その場面を看護師と一緒に見ながら、「相互作用が起きていると思われる場面」で何を感じ、考え、どのように対応したのか、それに対して子どもがどのように反応していたのかを尋ねるため、再生刺激法でインタビューを行っていました。これはその場面の相互作用と

意味の生成に密着しようとするものであり、M-GTA のように過去から今までのその人の経験(ときには転機となった経験)を語ってもらうスタイルとは異なります。この意味でも、関心のあり方としては現象学的またはナラティブ・アプローチの方が方法論的整合性が高いと考えます。M-GTA は、実践知の構造化、理論化、概念化に優れた方法ですが、一回的経験の厚みを捉えるには限界があります。

研究会後、少し私なりに、M-GTA での概念化を行いながらも現象の記述、厚い記述を保持する方法がないかを考えました。私は、概念、カテゴリーの関係からなる複雑な結果図は必ずしも必要ではないと考えます。現象特性については、本研究では言語的コミュニケーションが困難な子どもに対して、看護師が“わからなさ”を抱えながらも、非言語的反応を感受・意味づけし、関係を形成していく相互作用のプロセスが中核にあると整理されます。これに関わる M-GTA で生成された主要概念、たとえば、「存在を認識されている感覚」「子どもの思いの探索」「思いが通じ合う実感」「子ども理解の不確かさ」「表現の意味を理解」「自己の感情の影響」「協力の実感」「心地よさの提供」など、それぞれの主要概念について、代表的な場面を詳細に現象学的記述として丁寧に読み解き記述するという形も可能ではないでしょうか。

このアプローチは、厳密には M-GTA のモデル構築からはやや逸脱する部分もありますが、M-GTA で抽出された概念を“語りの厚み”と結びつけながら再解釈するという意味では、M-GTA と現象学の橋渡しの手法として有効であると考えます。読者にとっても、抽象的なカテゴリーだけではなく、その背後にある具体的経験のリアリティが伝わる構成となり、臨床・実践への示唆が強化されるでしょう。

いずれにせよ、方法論ありきではなく、データや問い、問題関心にそった方法を選択していくことが重要だと考えます。得難いデータをすでにお持ちなので、このデータを十分に活かせる方法を選択して分析を行っていただきたいと願っています。また研究指導を行う立場の教員も、学生の問題関心のあり様やデータの特徴を踏まえた方法を助言する必要があると考えます。

繰り返しますが、方法論ありき、ではないことは指導する立場の人間は心して向き合う必要があると考えます。

3. 研究の概要

1) 研究の背景

重症本研究の動機は、私が看護師として最初に勤務した重症心身障害児施設での経験にある。重症心身障害児(以下、重症児とする)と初めて関わった当初、私は無意識に距離を感じていたが、日々の看護の中で、子どもたちが非言語的に自己を表現していることに気づき、関わりを重ねるうちに「一人の人」として受けとめるようになった。このような気づきや関係性の変化は、他の看護師にも共通する経験ではないかと感じ、関心を持った。

過去の研究から、訪問看護師は単なる看護提供者にとどまらず、重症児との相互作用を通じて自身も変容する可能性があることが明らかになっている。この経験を踏まえ、両者の間に生じる相互作用のプロセスと、そこで生まれる気づきや変化に注目したいと考えた。

重症児は「重度の知的障害及び重度の肢体不自由が重複している児童」(児童福祉法第七条第二項)と定義されており、疾患や症状は多岐にわたる(窪田, 2019)。また、重症児は、意思表示やコミュニケーションが困難なことが多く、その看護には医療的ケアや成長発達を促すケアなどの知識や技術とともに、家族へのサポートや関係者との連携など多岐にわたる(甲斐ら, 2011; 浅井ら, 2015; 松澤ら, 2016; 山本ら, 2022)といわれている。また、重症児への看護は一方向的な看護提供だけでなく、看護師と重症児との社会的相互作用がなされ、それが看護師のケアに影響していることが論じられている。

児は希少疾患で医療的支援を要することが多く、成長に応じた支援が必要である(北住, 2022)。こうした背景から、在宅療養する重症児への支援として訪問看護が活用されている。訪問看護ステーション数および訪問件数は近年増加しており、2024年には事業所数 17,329 件、訪問件数は 2023 年 12 月で約 52 万件に達している(日本訪問看護財団, 2024;厚生労働省, 2023)。一方で、重症児者への訪問を行っている事業所は 36.9%にとどまり、実施していない理由は「訪問依頼がないため」(88.4%)のほか、「職員の経験・人員不足」なども挙げられている(全国訪問看護事業協会, 2008)。

看護において、Orem(2001)や Peplau(1952)、Travelbee(1974)や Riehl(1980)などの看護理論家は相互作用の重要性について述べている。Peplau(1952)は、「看護婦が自分を観察の手段として、より厳密に利用できるようになればなるほど、看護のプロセスにおける行為に関する観察がよりよくできるようになる。看護婦—患者間の相互作用の分析は、看護業務の向上のための基礎資料を提供する」と述べている。看護師は一方的に支援を提供しているのではなく、看護師も重症児から影響を受け変化する。そうした社会的相互作用を意識することが看護師と重症児との関係性の改善や看護の質の向上につながると考えられる。

訪問看護師と重症児の社会的相互作用に関する既存の研究を把握するため、文献検討を行ったが、訪問看護師についての論文は 1 件のみで(大北, 2019)、訪問看護師と重症児との社会的相互作用は具体的に解明されていない(後藤ら, 2024)。

本研究の目的は、重症児に対する看護において、訪問看護師と重症児との社会的相互作用のプロセスを明らかにすることである。本研究の意義は、今後、地域で暮らす重症児が増加することが予想され、多くの訪問看護師が重症児の看護にかかわる機会が多くなる。そのようななかで、訪問看護師と重症児の社会的相互作用のプロセスを明確にすることは、表出している意思を理解することが困難と思われる重症児の観察や理解を深める一助となる。このことは、重症児への看護の関心を高め、その看護上のニーズをよりの確に把握し対応することにつながり、重症児の生活の質の向上に寄与すると考える。

2) 研究の目的

研究の目的は、重症児への訪問看護場面から訪問看護師へインタビューを行い、訪問看護師と重症児の社会的相互作用のプロセスを明らかにすることです。訪問看護師が重症児とのコミュニケーションをどのように行い、関係を構築しているかを探求することです。

3) M-GTA に適した研究であるか

「どのような社会的相互作用が生じているのか」というプロセスに焦点を当てて明らかにしていくことを目的としており、そうしたプロセス志向の分析に適していると考え、M-GTA を選択した。

また、データ収集の過程で出会った訪問看護師の方々の語りから、実践現場で役立つ知見を導き出すことの意義を強く感じた。これらの知見を現場へフィードバックされ活用がより可能になるために、M-GTA は有効だと考えている。

4) 分析テーマへの絞り込み

分析テーマは当初、「重症児への看護提供場面において、訪問看護師と重症児の間で起こる社会的相互作用のプロセス」としていた。SV を受けていく中で何度も修正を繰り返し、発表の段階では以下のような分析テーマとして発表を行った。発表後、分析テーマを見直し、分析内容を見直している。

「言語的コミュニケーションが困難な在宅重症心身障害児のケアを通して理解するプロセス」

5) 分析焦点者の設定

分析焦点者は、「重症児への訪問看護を行っている看護師」とした。

6) 結果の概要

発表時点で23の概念を抽出し、カテゴリー化と概念間の関係図(結果図)を作成した。コア概念を中心に、影響要因や並行するカテゴリーを配置し、全体構造を構築した。

発表準備を通して、M-GTA では全体像を捉えることで、概念同士のつながりが明確になると実感した。たとえば、訪問看護師はケアを通じて子どもの存在を感じ、それにより自らも子どもに認識されている感覚を得るなど、ケアを通じた相互交流の構造が見えた。

7) SV を受けての変更点

大きく2点の指摘を受けた。1点目は、この研究がM-GTAに適しているかどうか、2点目は分析テーマの不適切さであった。

研究の動機は、訪問看護師が重症児とどのように意思疎通・交流し、理解を深める中で自身がどのような影響を受けるのかへの関心からである。自身や他の看護師の経験から、子どもとの関わりが看護実践に影響し、より個別的なケアへつながっていることを感じたためである。このプロセスを具体的に捉えるため、訪問場面を撮影し、再生刺激法によるインタビューを実施したが、現象学的分析やエスノメソドロジーの方が適しているのではとの指摘を受けた。一方で、「看護師の視点で訪問場面を分析する」方向性を明確にすれば、M-GTAでの分析も可能ではないかという助言もあり、現在はその視点で進めている。

また、分析テーマの焦点が曖昧で、何を描こうとしているか不明確との指摘も受けた。特に「ケア」なのか「理解」なのかが曖昧で、看護の特徴も十分に表れていないと意見があった。今後は分析テーマを見直し、概念の抽象度を下げて分析を進めていく予定である。

8) 分析を振り返って

分析テーマや概念名、カテゴリー名を考えることが難しい。常に迷い、考えながら現在もいる。現時点では、まだまだいろいろな点で研究として十分ではないことがわかった。また、他者に伝える難しさを改めて実感し、理解してもらえる表現力などをつけていく必要性を感じた。さまざまなご意見やご助言をくださったみなさまに感謝申し上げます。

9) 主な引用文献

浅井桃子他(2015).重症心身障害児の家族の強みに対する訪問看護師の認識.家族看護学研究, 21(1), 67-76.

甲斐恭子他(2011).重症心身障害児とその家族への外来看護師の想いの変化—アクションリサーチを通して—.日本小児看護学会誌, 20, 70-77.

木下康仁(2020).定本 M-GTA: 実践の理論化をめざす質的研究方法論(pp.62-93).医学書院.

松澤明美他(2016).茨城県北・県央地域の訪問看護ステーションにおける小児訪問看護の実施状況と課題.茨木キリスト教大学看護学部紀要, 7, 19-27.

前田浩利(2011).小児在宅医療.日本小児科医会会報, 42, 71-74.

- 大北真弓(2019).重症心身障害児をケアする訪問看護師の思い.日本重症心身障害学会誌, 44, 615-621.
- 大島一良(1971).重症心身障害の基本的問題.公衆衛生, 35(11), 4-11.
- 渡辺和志他(1991).授業における児童の認知・情意過程の自己報告に関する研究.日本教育工学雑誌, 15(2), 73-83.
- 山本智子他(2022).在宅で生活する重症心身障害児と家族に対して訪問看護師が行う支援に関する文献検討.せいれい看護学会誌, 12, 17-23.
- 横地健治(2015).重症心身障害とその周辺.重症心身障害の療育, 10(1), 1-6.

【第二報告】

田原 ゆう子(日本赤十字九州国際看護大学大学院 共同看護学専攻)

Yuko TAHARA: Cooperative Doctoral Course in Nursing, Graduate School of Nursing, Japanese Red Cross Kyusyu International College of Nursing

臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相 —新任期にある若手看護系大学教員に焦点を当てて—

Aspects of Career Transition from Clinical Nursing to Nursing Faculty —With a Focus on Junior Nursing Faculty in New Terms—

1. 発表の過程を通しての感想や学び

この度は、貴重な発表の機会をいただき誠にありがとうございました。また、SV をいただきました林葉子先生には、たくさんのお力添えを賜りました。心より感謝申し上げます。さらに、発表の際多くのご助言をいただきました先生方、ならびに世話人の先生方にお礼申し上げます。

本研究は、大学院博士課程の中で取り組んでいる研究であり、初めて M-GTA に取り組んでいます。M-GTA を研究方法に選択してからは、定本をはじめとする文献を何度も読み返し、また多くの M-GTA の先行研究をクリティークしながら学びました。しかし、いざ分析に取り組んでみると、分析方法はこれで良いのか、解釈は妥当か、概念名は適切かなど、思い悩むことばかりが増えていきました。一人でデータに向き合うには不確かなことが多く、まさに暗中模索の苦しい状態のまま 20 例の分析を終えましたが、思うような結果を導くことができず行き詰まっていたところ、定例研究会での発表のお話をいただき、大変ありがたく思った次第です。

SV では分析テーマを見直し、1 名の方について、概念生成からカテゴリー生成、結果図、ストーリーライン作成の一連についてご助言いただきました。特に、私が生成した概念は定義のように説明的になっており、概念の中にプロセスがありました。そこで概念は最小単位であること、コンパクトでインパクトのある言葉で表現するようご指導いただきました。また分析ワークシートの理論的メモを活用し、概念のプロセス性や相互作用に着目しておくこと、結果図が作成しやすいことなどをご助言いただきました。定例研究会にご参加の先生方からもご助言いただいたように、生成した概念名がヴァリエーションから飛躍しすぎていたり、抽象度が上がりすぎているため事象の詳細が見えにくくなっていること、すなわち臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相が見えにくいことが課題として理解できました。また結果図においては、現在の配置では時系列になっていること、概念同士の関係性が見えないことが課題として明らかになりました。grounded-on-data を意識した概念を生成し、プロセスと相互作用をどのように表現す

るのかについても、今後分析を継続する中で再考していきたいと思います。

定例研究会では多くの質問や熱意あふれるコメントを賜りました。ディスカッションを深めることで、研究テーマの選定、問題意識の明確化、分析テーマの選定、カテゴリーの考え方など、研究を今後どのように深めていくべきかという多くの示唆をいただきました。研究の過程は自己との孤独な戦いですが、先生方からいただいたご助言をヒントに理解を深め、今後も研鑽を積み、応用する人に還元できる理論生成を目指していきたいと思います。改めまして、このような貴重な学びの機会をいただき、誠にありがとうございました。

2. スーパーバイザーのコメント

林 葉子((株)JH 産業医科学研究所)

田原さんのご研究は、看護教員の質と量の双方を充実・強化させることが必須となっている昨今の看護大学にとって、有意味な研究となるであろう。田原さんは、ご自分の研究の目的である「新任期にある若手看護系大学教員に焦点を当て、臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相を明らかにすること」を分析するためには、「臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相をプロセスの観点から明らかにする」ために、M-GTA の分析方法を選択し、木下先生の著書を読みながら、独学で分析し始めていたところであった。ご自分も当事者の一人であったピア研究でもある。

初学者ながら検討している様子は見られたが、初学者ならではの分析結果も見られ、1 ヶ月という短い間ではあったが、分析のはじめからやり直すことを勧めたところ、快諾を受け、分析テーマ、分析焦点者の設定から SV を行った。

(1) 分析テーマと分析焦点者

田原さんは、上記に記したように、田原さんが「何を明らかにしたいのか」が、明確であった。「臨地の看護職から看護系大学教員へ移行していくプロセス」という分析テーマはほぼ良かったとは思ったが、すでに多くの研究協力者へのインタビュー調査が終了していて、どういふうに移行していったのかイメージしていらっしゃるようすであったので、「大学教員への移行」をもっと具体的にイメージしたほうが分析しやすいのではないかと SV し、「アイデンティティの移行」に変更なされた。とりあえず、1 事例の分析を初めていただいた。分析が進んでいくと、「看護大学教員のアイデンティティ」とはどういうことかが、もっと明確にわかってくると思うので、さらに検討して最終的な分析テーマを決めていってほしい。

また、分析焦点者の範囲も「新任期にある若手看護系大学教員」であったが、「若手」とは、実際の年齢ではなく、「新任」であることの強調として残しておいた。ここは、説明が必要であろう。

(2) 分析ワークシート(概念生成)

概念の生成について、定例研究会には参加していたものの、木下先生の著書を読破してはいるものの、実際の講義を受けたことがないということであったので、まず、分析ワークシートの生成の仕方をメールで簡単に説明した。その中で注意した点は以下の4点であった。

- ① 一番語ってくださっていると思う 1 事例を選択して、分析、結果図、ストーリーラインまで、分析すること
- ② 一番印象に残った部分(気になったところ)から概念を作り始めるとつくりやすいこと
- ③ ヴァリエーションが何を語っているかを解釈して定義を書くこと。概念名は定義の要約ではないこと。

④ 理論的メモには、以下のことを書いておくと 2 事例目からの分析がしやすく、最終的には論文を書く時のヒントにもなると説明した。つまり、なぜ、その部分を選んだのか、なぜ、「定義」のように解釈したのか。その部分は分析テーマのどこに位置していると思うか→仮概念図で推測してもよ

い、他のどの概念と関係があるのか（前後関係等）、その他に定義をかえた理由や思いついたこと書き込んでおくが良いと説明した。

概念の生成で田原さんにSVしたところは、説明的な概念名が多く、リアリティ感が薄かったことと、一つの概念に2つの要素（プロセス的なもの）が入っていたこと、概念と定義に同じ言葉が使用されており定義が説明になっていない、などである。修正期間が短かったので、概念名の再検討をSVする時間がなかったが、概念の分離についてはがんばって自力で、一つの概念を2つに切り離して、あらたな概念を生成した。また、定義と概念に同じ言葉がないように修正していただいた。

(3) カテゴリー化、結果図とストーリーライン

概念生成修正後、結果図、ストーリーラインまでをSVした。

結果図は、短い期間で頑張られたが、相互作用を示す概念をどのように実際の状況だけの概念のなかに、入れていくことができなかったという質問があったので、相互作用の様子をどのように入れていくかを説明した。相互作用がわかるプロセスとは、ある概念がターニングポイントになり、実際の状況が次のステージに進んでいった様子がわかるようにしていくと、相互作用の様子がわかる結果図になると説明した。最初の部分のみ、田原さんから、データについて話していただきながら、最初の「戸惑い」が変化していったなかで、どのような相互作用＝ターニングポイントがあったかを聞き取って、作図を一緒に行った。

ストーリーラインは、カテゴリー名だけで作成され、そのために、間の説明文が長く、例もあげられており、考察のようなものも含まれていたので、概念の語尾を変えるだけで、すべての概念を使って、分析テーマのプロセスを書いてみるようにSVした。

結果は、発表の通りである。短い期間のなかで、少しずつ、M-GTA の分析方法を理解して、自力で最終原稿を作成したところはほめてさしあげたいと思う。1 事例目を丁寧に分析して、定例研究会で多くの方々からの貴重で有意義なご意見をいただけたところまで、この1ヵ月、とても頑張られたと思う。

最後に追加して、この理論を分析焦点者以外にも誰に利用してほしいのかも、常に意識しながら概念を生成していくと、もっとリアリティ感のある概念になっていくように思う。皆様からの貴重なご意見をわすれないうちに、あとの事例も分析して、結果図を仕上げていかれることを進言した。とても良い研究テーマなので、誰かに利用していただける理論になっていけることを心から祈っている。

これからM-GTAで分析しようとなさっている会員の皆様には、木下先生のご著書を読破したうえで、疑問点を持ちながら定例研究会に最後まで参加して疑問点を解消し、ご自分のデータの分析時に当研究会のホームページに掲載してある「学習コンテンツ」を見ていただくと、M-GTAの分析方法がより理解しやすくなると思うので、この順番で学習して分析し始めることをお勧めしたい。余談ながら試していただきたいと思っている。

3. 研究の概要

1) 研究の背景と動機

【看護系大学教員を取り巻く社会的背景】

近年、少子高齢社会にある我が国においては、優れた看護系人材の養成を使命とする看護系大学への期待はますます大きくなっており(文部科学省, 2019a, p.2)、看護基礎教育を充実させるためには、看護教員の質と量の双方を充実・強化させることが必要であると述べられている(厚生労働省, 2010, p.3)。松浦, 竹末, 鶴田(2013)は、大学数の短期間における大幅な増加が、「教員の急造・急増」「教員の流出・転入」ひいては教育力の停滞という課題を引き起こしていると述べており(p.23)、看護系大学における

教員の課題について文献検討を行った鈴木ら(2019)は、増加する看護系大学において、文部科学省の大学設置基準に示される教員数を考慮すると、教員不足が深刻化することが懸念されると記述している(p.61)。これらのことから、看護教員の質と量の確保は喫緊の課題である。

【看護系大学教員の社会的背景】

一般に大学は、ディプロマ・ポリシーによってカリキュラムが編成され、固有の学的基盤を持つ専門職者の養成には、同じ学的基盤を持つ専門職者が関わる。しかし看護系大学における看護教育は、看護師国家試験の受験資格を与えるための看護師養成教育といった職業教育と、大学において行われる看護学教育の2つを担っている(杉森, 舟島, 2012, p.6-10)。そのため、将来的に看護系大学教員になろうとする者であっても、数年は臨地において看護実践を行っており、看護教員を目指して大学院へ進む者もいれば、スペシャリストを目指して大学院へ進学し、その後教員にスカウトされる者、看護教員になってから修士課程へ進む者など、看護系大学教員へのルートは様々である。

【研究への関心】

臨地の看護職から看護系大学教員へと、新たな職務に従事し始める新任期は、環境に適応し、他者との関係性を築きながら、求められる職務を果たすことが期待されるため、内的な葛藤が大きい時期である。そのため、看護教員としてのアイデンティティのゆらぎを実感しながら職務と向き合っていることが報告されている(田中, 2018)。それゆえ、新任期にある若手看護系大学教員が、臨地の看護職から看護系大学教員への役割移行において、組織との相互作用の中からどのような内的変化をしているのかを明らかにし、その結果、いかなる看護教員としてのアイデンティティを構築しているのかという、臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相を描くことで、新任期にある若手看護系大学教員が置かれている現状を明らかにすることができるのではないかと考えた。さらに、臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相を描くことは、看護系大学教員になるための公的な準備教育や組織的な支援体制が十分に整わない中キャリア・トランジションを迎える、新任期にある若手看護系大学教員のガイドになると考えられる。また、同僚や上司、それらが属する組織や組織風土といった、相互作用を引き起こす大学組織にとっては、新任期にある若手看護系大学教員のキャリア・トランジションを支える組織支援策の構築に関する具体的な示唆が得られると考えられる。加えて、看護教員個人のキャリア発達は教育の質に影響を及ぼし、看護教員と相互作用を引き起こす学生へと還元され、ひいては看護基礎教育の質の向上に役立つ可能性も考えられる。そのため、社会的な意義があると考ええる。

一方、先行研究における新任期にある看護系大学教員のキャリア発達上の課題は、新人看護教員がどのように力量を形成しているかというプロセスは述べられているものの(田中, 2018)、役割移行上の課題の抽出にとどまっており、組織との相互作用の観点からどのようなアイデンティティを獲得したのかについては論じられていない。加えて、日本において、臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相を描いた先行研究は見当たらない。これらから、新任期にある若手看護教員の現状を理解するためには、看護教員への役割移行における課題の理解に留まるのではなく、新任期にある若手看護系大学教員が組織との相互作用においてどのような経験をし、その結果、看護教員としてどのようなアイデンティティを構築しているのかという、プロセスとしての探求が必要なのではないかと考えた。新任期にある若手看護系大学教員の内的変化をプロセスと成果の観点から描くことで、支援策の構築に必要な示唆を得られるのではないかと考えている。

2) 研究目的

新任期にある若手看護系大学教員に焦点を当て、臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相を明らかにすること

3) M-GTA に適した研究であるか

- ①**プロセス性**: 新任期にある若手看護教員が置かれている現状を理解することを目指しているため、データを切片化せず、データ中のコンテキストの理解を重視し、そこに反映されている人間の認識、行為、感情やそれらに関係している要因などをていねいに検討し(木下, 2003, p.158)、プロセスを描ける M-GTA が適している。
- ②**社会相互作用**: 臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションにおいては、社会相互作用の結果、他者や組織との関係性の中から自らの世界を構築していくと考えられる。そのため、社会相互作用を描き出すことができる、シンボリック相互作用論を哲学的前提としている M-GTA が適している。
- ③**理論化**: 臨地の看護職から看護系大学教員へのキャリア・トランジションの様相を明らかにすることによって、組織との相互作用の中から看護教員としてのアイデンティティを再構築していく過程を描くことを目指しており、その結果を領域密着型理論(説明モデル)にまとめることで、これから看護教員を目指す者やトランジションの最中にある者の実際の活用に役立つことが期待される。

4) 分析テーマへの絞り込み

分析テーマははじめ「臨地の看護職から看護系大学教員へ移行していくプロセス」としていた。しかし、これでは何が移行していくのかが見えず、単に転職を指しているように見えるとの SV をいただいた。そのため、何が変化するのかを明らかにするため、「臨地の看護職から看護系大学教員へアイデンティティが移行していくプロセス」に分析テーマを変更した。

5) 分析焦点者の設定

新任期にある若手看護系大学教員

6) 結果の概要

R 氏が臨地の看護職から看護系大学教員へアイデンティティが移行していくプロセスとは、<上司の経験を聞く(き)>、また<生かしたいと期待する臨地経験>から<子育てと仕事両立のための転職>を決意する、【新たなキャリアへの期待】から看護系大学教員になることから始まる。

看護職者が教員として大学組織に身を置くと、<看護教員の役割がわからない><活かさない看護実践力><戸惑う社会的慣習の違い><研究業績への期待>といった<劣等感を持たされる職務>を担うことによって、<経験だけでは通用しない>という【できるはずの自分との葛藤】に遭遇する。

そこで新任期にある若手看護系大学教員は、<実習の学生の姿に気づかされ(る)>、<学生理解の大切さ>に気づく。また、<助教らとコミュニケーションを図る(り)><上司に支えられる>という教員同士が【つながる】ことによって、【「できない自分」を内省】し、<待っていても変わらない>こと、<研究への使

命感と責任感>を求められていることに気づく。

教育については、<学生理解の大切さ>に気づくことによって【教員役割を模索】し、支援の中心が<患者から学生へ>変化する。また大学組織における諸問題については、<待っていても変わらない>ことに気づき、<組織の情報を得る>ことで<期待された役割を遂行できる>ようになる。さらに、教育や大学組織に貢献している姿を<認められ自信を得る>ことにより、新任期にある若手看護学教員は<教員=研究者の気づき>を得、<研究を学ぶ(び)>、また<上司からの研究支援>を受け、さらに<自信のために学ぶ>ようになる。

このように、【つながる】ことによって【「できない自分」を内省】し、【教員役割の模索】することで、その結果<学生の成長を見守る>ことや<教育に貢献できる喜び>を実感し、さらに<自信のために学ぶ>という、【やりがいの獲得】へと変化していく。

7) SV を受けての変更点

- ・分析テーマ: テーマの中に「何が」移行するののかという具体的内容を加えた
- ・概念名: 定義のような文章になっていた(定義と重複していた)。そのため、概念の内容は1つになるよう修正し、コンパクトでインパクトのある概念名になるよう修正を加えた。
- ・カテゴリー生成: 概念同士の関係性(プロセス)に着目した。相互作用を意識しながら概念を結果図に表すことで、分析テーマの中のプロセスが浮かび上がってきた。

8) 分析を振り返って

SV では、1つの概念に要素が盛り込まれすぎると、他の概念とのうごきが捉えられなくなるため、1つの概念に内容は1つとなるように見直していきました。その際、分析焦点者の動き(様相)を捉えた概念生成をすることが非常に難しく、今後もデータを解釈しながら、コンパクトでインパクトのある概念を生成していく必要性に気づくことができました。まだまだ課題は山積していますが、M-GTA で分析焦点者の動きを捉え、キャリア・トランジションの様相を描けるよう努力したいと思います。

最後に、今回 SV をご担当いただきました林 葉子会長に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

【文献】

- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.
- 厚生労働省 (2010/2/17). 今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書.
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf>[2022/4/12 閲覧]
- 松浦江美, 竹末加奈, 鶴田早苗 (2013). 新設学部における看護教員の教育ニーズの現状と課題. 活水論文集看護学部編, 1, 23-31.
- 文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2019). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告 大学における看護系人材養成の充実に向けた 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応策. https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-000003663_1.pdf[2022/7/12 閲覧]
- 杉森みど里, 舟島なをみ(2012). 看護教育学 第5版. 医学書院.
- 鈴木由美, 金子順子, 入江浩子, 森川奈緒美, 松本政人, 林圭子, 小野崎美幸 (2019). 国内文献にみる看護系大学における教員の課題について. 国際医療福祉大学学会誌, 24 (2), 61-72.
- 田中千尋 (2018). 看護系大学に所属する新人看護教員の力量形成の様相. 日本医学看護学教育学会誌, 27 (2), 21-28.

【参加者の感想】

- ・ M-GTA を選択することが適切か、という議論から始まったことには驚きましたが、本当に大切な問題だと思いましたし、私も研究テーマからは現象学的研究についてイメージしておりました。
- ・ データをとる前の段階で、ご指導をいただくこともできればいいなと思いました。M-GTA の分析方法がふさわしいのか否か、インタビューガイドに含むべき内容等も知りたいと思いました。
- ・ とても勉強になりました。分析テーマを深く考えたうえで分析を進める重要性を理解しました。プロセス性という意味では、流れをまとめるのではなく分析焦点者の転換点を読み取るこちらの感受性というものも必要なかと思いました。
- ・ 今回「MGTA の分析とは異なる」という指摘が何度かあり、これをどのように理解するとよいのか、というところが疑問であったのですが、グループワークで質問させていただき、ファシリテータの先生のご説明で少し理解が深まったように思われます。木下先生の書籍も読んでみたのですがなかなか理解するのが大変になりますので、ひきつづき研究会に参加して、MGTA の研究デザインについて理解を深めて研究を進める必要があると感じました。貴重な機会をいただきありがとうございました。
- ・ 初めて参加しました。4月に大学院に入って、修論のためにM-GTAについて学び始めたところです。発表の最初は難しいと感じていましたが、全体を通してM-GTAだけでなく、研究そのものに必要な具体的な視点を学ぶことができました。「何を知りたいのか?」「誰にどう活かしてもらえるのか?」研究の根本を見失わずに取り組みたいと思います。ありがとうございました。

◇近況報告

(1) タイトル	(2) 氏名	(3) 所属	(4) 研究領域	(5) 研究に関するキーワード	(6) 内容
----------	--------	--------	----------	-----------------	--------

(1) 原著論文が掲載されました

(2) 吉羽 久美

(3) 東京女子医科大学看護学部

(4) 公衆衛生看護学

(5) 公衆衛生看護学 子ども虐待

(6) 2023年4月第98回M-GTA定例研究会で発表をさせていただきました吉羽久美と申します。この時に発表をした調査が今回、日本看護科学会誌に原著論文として掲載されました。論文のタイトルは「乳幼児期の子どもへの接し方に育児困難を感じる母親の援助要請のプロセス」です。この時、M-GTAに初めて取り組み、質的データ分析に悪戦苦闘をしていた私のSVを引き受けていただきました唐田順子先生、研究会を担当していただいた阿部正子先生、また研究会の世話人の先生方には大変お世話になり、このような論文として日の目を見ることになりました。改めて本当にお世話になりました。深く感謝を申し上げます。

◇次回のお知らせ

○第18回修士論文発表会

日時:2025年7月19日(土)13:00～

会場:ハイブリッド開催(対面:大正大学) / (オンライン:Zoom)

◇中四国 M-GTA 研究会 活動報告

中四国 M-GTA 研究会では年 4 回の定例研究会を行っており、令和 5 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行したことを受け、令和 6 年度からは全ての回を対面での開催することとしています。

令和 7 年度の第 1 回目の定例研究会は 6 月 1 日(日)に総会開催後に実施しました。講師の長崎和則先生から、「分析テーマと分析焦点者を視野に入れた概念生成」をテーマに、故木下康仁先生のご著書である「定本 M-GTA 実践の理論化をめざす質的研究方法論」の頁を示し、具体例を挙げながら、テーマを選定する理由や分析の流れ、概念生成の実際、概念生成作業で起こる困難などをご教授いただきました。約 1 時間半のご講義の後、少人数のグループに分かれ、質問や感想を話し合い、全体で質問を共有しました。参加者からは、半構造化インタビューについての質問や対極例の取り扱い、概念作成における留意点などの質問があり、長崎先生から全ての質問に対する回答を得ることができました。参加者の中には M-GTA について初学者の方がいらっしゃいましたが、継続して学習したいという声が聞かれ、充実した研究会となりました。

◇編集後記

定例研究会と同日に、総会も開催され、新年度がスタートしました。104回を数える定例研究会は、私たちの学びの場の中心となっていますが、さらに、新しい学びの場が加わりました。ホームページ上で、M-GTAについて学べる学習コンテンツを、会員限定で公開しています。タイトルは「M-GTA分析の基本のキ」です。すでに、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。残念ながら、学習コンテンツは一方方向ですので、ご覧になりましたら、是非、ご意見・ご感想をお寄せいただくとありがたいです。今後も、学習コンテンツを公開していく予定ですので、皆様のご意見を参考にして、より良いものにしていきたいと考えています。もちろん、ニューズレターも、ユニークな学びの場だと思います。発表の中では触れられなかったことからも書かれていますし、発表者とスーパーバイザーのやり取りを双方の視点から理解することもできると思います。次回は修士論文発表会です。次号も楽しみにしてください。(丹野ひろみ)

世話人:阿部正子、今井朋子、唐田順子、菊地真実、岸田泰則、坂本智代枝、佐川佳南枝、隅谷理子、
丹野ひろみ、都丸けい子、長山豊、根本愛子、畑中大路、林葉子、平塚克洋、山崎浩司
(五十音順)

相談役:小倉啓子、小嶋章吾 (五十音順)

名誉会員:青木信雄、小倉啓子、木下康仁(故人)、水戸美津子 (五十音順)

編集・発行:M-GTA 研究会
研究会のホームページ:<https://m-gta.jp>
問合せ先:研究会事務局アドレス office@m-gta.jp